女性上位社会

H「よっ！熊さん、元気かい？久しぶりだねぇ。ところで最近は女性の活躍が目覚ましいね。政府も女性が働きやすい環境を作るってさ。結構毛だらけ、猫灰だらけだね」

K「まあな、だがな、八っつぁん、よく考えたら、女性を働かせすぎると少子化が進むぜ。そうなると年金がなくなる。それどころか人類滅亡だ。少しは休ませてやらにゃ。なんせ子供を産めるのは女性だけだからな。男はどう頑張っても子は産めねぇ」

H「ね、年金がなくなると困る。人類滅亡も困る。そ、そんじゃ、俺たちが家事全部やって、女性の負担を少なくしよう。ハウスキーパーだろうがベビーシッターだろうが、何でもやるよ」

K「そりゃ、名案だ。そもそも男のほうが料理上手だしな。最近のスーパーじゃ定年退職オヤジが惣菜を作っているが、これがめっぽう旨い。それに教育係ってぇのも悪くない」

H「そんじゃ、俺達それで生き残れるね。専業主夫ってやつ」

K「おいおい、八っつぁん、まだ産休体制が社会全般で整っているわけじゃない。おまえさんとこみたいな家は、専業主夫じゃ食いっぱぐれる。男もある程度稼がにゃならん」

H「そうかなぁ」

K「それに男は女性を称賛するばかりじゃなく、自分の勉強も怠っちゃいけない」

H「どうしてだい？」

K「少子化防止ってぇことは、子供を作るんだろ？」

H「うん」

K「てぇことは、畑が良くても、種が悪けりゃ、アホの実しか生らねぇ」

H「アホが増えても困るわけだ。なるほど量より質か。それでも数が増えたほうがいいんだろ」

K「まあな、だがやっぱり手のかからねえ出来のいい子を持ちたいのが人情ってもんよ。現に今どき男があぶれているのは、女性が相手を選んでるってことさ。だから男は自分を磨かにゃならん」

H「なるほど」

K「それでも男の身の上は安泰じゃない。女性が一人で何でもできちまえば、男は種馬以外に使い道がない。種馬ってぇのはな、用がなくなると処分されるんだ」

H「えっ、するってぇと、子を宿したら離婚かい」

K「まあ、そういう事もありうるな。だから専業主夫じゃ生きていけない」

H「困るよ、それは。やっぱり男も女性ばかりに頼らずしっかり働かなきゃいけないね」

明治時代と真逆になった世の中の話でした。